

# 美しい吉林の冬 極寒の世界体験

長崎大多文化社会学部の学生が留学先での体験を報告する「環球通信」。4回目の今回は、初のアジア圏となる中国から。広大な国土に多様な民族が暮らす国ならではの、自然や文化をレポートしてもらいます。



日本では梅雨に入り始めた6月の初め。北京ではすでに猛暑が訪れ、気温40度を記録した。北京外国語大学に留学したのは、昨年9月。これほど暑い北京も、冬は平均が零下5度ほどと、寒い日が続いた。

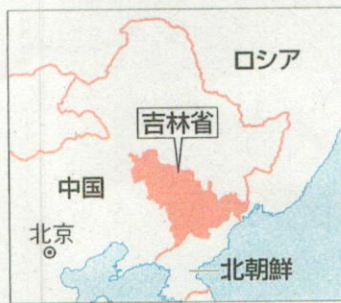
その冬、美しい雪景色を見るために、中国東北地方の吉林省を旅することにした。北京から北東に約1千キロ。中国では「高鉄」と呼ばれる高速鉄道が国内各地を結んでいる。高鉄に乗ればどこへでも旅行ができ、とても便利だ。



雪景色をとみに見た仲間



雪景色を楽しむ筆者=2018年1月



@北京外国語大

吉林の冬景色は、息をのむような美しさだった。湖に景色が映る様子は、さながら「自然の鏡」。現実とは思えない、絵本のような世界が広がっていた。冬の吉林省は、零下20度前後まで冷え込む。雪は腰の高さまで積もっていた。極寒の地では携帯電話やカメラの電源がすぐに落ちてしまう。冷やさないよう、カイロで温めた。便利な電子機器も、大自然にはかなわないのだと感じた。

吉林省は、鴨緑江を挟んで北朝鮮と接している。中には、川を歩いて渡れそうなど近い所

## 国境の街に息づく朝鮮文化

もある。カメラのレンズをのぞくと、北朝鮮の人たちの表情まで分かった。吉林省の東端にある琿春市という都市まで足を延ばすと、北朝鮮とロシアを同時に見ることもできた。街の看板は中国語、朝鮮語、ロシア語の3カ国語で書かれていて、この土地ならではの光景といえる。

中国には、人口の9割以上を占める漢族のほか、55の少数民族がいる。吉林省には少数民族の「朝鮮族」が住む。昨秋に旅行した際には朝鮮族の家に民泊させてもらった。朝鮮半島などでよく見られる床暖房システムであるオンドル式の家で、家族のように歓迎された。

料理には、犬の肉がふんだんに使われていた。犬の肉は中国や韓国、ベトナムなどで食べる地域があり、朝鮮族にとって最大のおもてなしなのだという。「アリラン」など朝鮮の歌や、豪快なダンスも披露してくれた。近代化が進む韓国では薄れてきている朝鮮の文化も、ここには色濃く残っているのかもしれない。そんなことを考えた。

中国国内を旅行するといつも、言語や食文化、習慣の違いの大きさに驚かされる。この国だけでも、世界がこんなにも広く、多様であることに気づかされる。(4年・北里友佳)



朝鮮族のおもてなし料理 2017年3月、いまでも中国・吉林省